

## 連載「プロマネの現場から」

### 第193回 贈与・ギブ&テイク以前に必要なもの

蒼海憲治（大手SI企業・グループ会社・事業部長）

私毎になりますが、この1月より東京本社の事業部門より、大阪にある関西地区のシステム子会社の事業部門に出向、転勤になりました。もともと生まれも育ちも大阪で、入社当初は関西地区に配属であったため、2年ほど大阪で仕事をした後、全社プロジェクトにアサインされ東京へ異動となりました。そのため、このたび大阪で仕事をするのは、30年ぶりとなります。上海から日本に戻ってきてからの2年半の間は、本社の事業部門より関西地区のシステム子会社のプロジェクトや業務の連携を行っていたため、管理者やベテラン層を中心に顔見知りの方も多く、また大阪のみなさんが元来フレンドリーな気質であることもあり、あっという間に馴染むことができました。ただし、若手・中堅層にとっては初めてになるため、「果たしてこの人はどんな人なんだろう？」「何を思い・何ができ・何をしてくれる人なんだろう？」と思っているかもしれない、と思いつつ、日々彼らと接しています。そんな中、大阪と東京を往復する新幹線の車中で手に取ったのが、近内悠太さんの『世界は贈与でできている 資本主義の「すきま」を埋める倫理学』（\*1）でした。しかし、最初に書名を見たときは、「いったん何が書かれているのか」と頭に疑問符が浮かんだのですが、読み始めてすぐに、私たちが日ごろ生きているギブ&テイクの限界を補うものとして、贈与という考え方があることに気づかされました。紹介されている一つ一つのエピソードに感動することしきりでしたが、今回は、ギブ&テイクの限界として、日頃あまり意識していない「贈与」という考え方について紹介してみたいと思います。また、「贈与」という考え方は、新しい人間関係を円滑に結ぶうえでもヒントになると思っています。

わたしたちは子供のころ、誰とでも友だちになることができました。同じクラスでたまたま席が隣になったり、同じ班になったりするだけで無邪気に友だちになることができました。しかし、大人になると、友人になることがとても難しくなります。

なぜ、「仕事上の知り合い」とは友人関係になりにくくなるのか？

それは、お互いを「手段」として扱うからだ、といえます。

「仕事上の知り合い」は「ビジネスパートナー」といわれますが、これは利害が一致している限りでの関係や共通の目的を持った者同士の一時的な協力関係を指しています。

そのため、相手が使い物にならなくなった場合や目的を達成した後は、お互いに助ける義理はない、いうドライな関係に戻ります。

つまり、相手に何かしてほしければ、こちらから何か対価を差し出すことを求められています。こちら側に相手が求める対価がなく、また「借りを返す」見込みが薄い場合、協力や援助をもらうことが難しくなります。これが、ギブ&テイクの関係、ウィン・ウィンの関係であり、「割に合う」なら助け、仲良しなる一方、「割に合わない」なら、関係せず、疎遠にし、縁を切ります。

「割に合うかどうか」という観点で物事の正否を判断する「交換の論理」に基づく関係においては、「差し出すもの」とその「見返り」が等価であるようなやり取りを志向し、貸し借り無しのフラットな関係を求めます。そのため、お互いに相手を「手段」として扱うこととなります。「私」は、相手にとっての利益という目的に対する手段でしかないからです。そのため、私たちは、自分のことを手段として扱おうとして近づいてくる人を信頼することができなくなります。親切にされればされるほど、何か裏がある・打算があるはずだと感じてしまいます。

このように交換の論理を生きる人間は、他人を「手段」として扱ってしまいます。この贈与が無くなった世界（交換が支配的な社会）には、信頼関係が存在しなくなります。裏を返すと、「信頼は贈与の中からはかき生じない」といえます。

交換の論理を採用している社会、つまり贈与を失った社会においては、誰かに向かって「助けて」と乞うことが原理的にできなくなります。何も持たない状況では、誰かを頼り、誰かに助けを求めることが原理的に不可能になるためです。

そのため、交換的な人間関係しか構築してこなかった人で、周囲に贈与的な人がおらず、また自分自身が贈与主体でない場合、私たちは簡単に孤立してしまいます。経済的・精神的・肉体的に追い詰められたとき、私たちは誰かを頼り、頼られるのが自然な姿だと思いますが、交換の論理はそれを拒否し、私たちは「助けて」と発することをためらうこととなります。そのため、交換の論理だけではない関係、贈与の必要性が生じます。

ところで、「贈与は、それが贈与だと知られてはいけない」という特徴がある、といいます。贈与だと知られた贈与は受取人にとって「呪い」に変わってしまうからです。この意味は、「これは贈与だ、お前はこれを受け取れ」と明示的に語られる贈与は、直ちに返礼の義務を生み出してしまい、その受取人の自由を奪うこととなります。受け取ったものが贈与であることが明らかにされてしまうと、見返りを求めない贈与から「交換」へと変貌してしまいます。そして、交換するものを持たない場合、受取人は負い目に押しつぶされ「呪い」にかかってしまうこととなります。

民話の「鶴の恩返し」で部屋を覗いてはならない理由はここにあります。機織りをしているのが、助けた鶴だと知られてしまうと、それは先行する贈与に対する返礼であり、鶴を助けた男はその返礼を受け取り、さらに再返礼をしてしまう可能性があります。その

ため、贈与者は名乗ってはならない。名乗ってしまうと、お返しがきてしまいます。贈与はそれが贈与だと知られない場合に限り、正しく贈与となります。

しかし、ずっと気づかれることのない贈与はそもそも贈与として存在しなくなりま  
す。そのため、贈与はいつかどこかで「気づいてもらう」必要があります。あれは贈与だ  
ったと過去時制によって把握される贈与こそ、贈与の名にふさわしいものとなります。だ  
からこそ、私たちは贈与の受取人としての「想像力を発揮するしかない」といいます。

なぜ私たちが贈与の受取人としての「想像力を発揮する」必要があるのか。つまり、  
受取人の出現によって初めて、贈与が出現する。その事例として、『16時の徘徊』の合理  
性」というエピソードが紹介されています。

ある男性の母親は認知症を患い施設に入っていましたが、毎日16時になると外に出  
ていってしまいます。いわゆる「徘徊」ですが、男性が必死になってその外出を止めよう  
とすると、母親はわめき、暴力をふるう日々が続きました。母親にその理由を尋ねても、  
はっきりした返事はなく要領を得ません。困った男性は、ベテランの介護職員に相談した  
ところ、その介護職員は母親の兄に連絡をとり、「16時」というキーワードで何か心当た  
りはないか尋ねました。すると、伯父さんは「16時」とは、幼かったころの息子が幼稚園  
からバスで帰ってくる時間ではないかと言います。その話を聞いた介護職員は、母親にこ  
う告げます。「今日は息子さん、幼稚園のお泊り会で、帰ってきませんよ。バスも今日は  
来ませんよ」。おまけにニセモノの「お泊り会」の案内状まで作って母親に見せました。  
するとどうでしょう、母親は、「そうだったかね?」と言って部屋に戻って行きました。  
その日を境に、同じように「今日は帰ってきませんよ」という説明をしてあげるだけで、  
「16時に外へ出て行ってしまう」という行為はなくなった、といえます。

つまり、ベテラン介護士によって、母親は一見不合理な「徘徊」という行為ではな  
く、「息子を迎えに行く」という物語の中を生きていたことが判明したのでした。この母  
親にとっては、愛する息子に寂しい思いをさせないために、16時のお迎えを阻止する存在  
は、暴力をふるってでも戦うべき敵だったのでした。

『16時の徘徊』という母親が差出人のこの贈与は、「実はこの私を迎えに行っていた  
のか」と男性が気づいた時点において、母親の行為が数十年の時間を飛び越えて、贈与と  
して出現します。つまり、贈与に気づいたのは今現在です。しかし、近内さんはこういい  
ます。男性はこの贈与をずっと受け取り続けていたのではないか。贈与はすでにここに届  
いていた。ただ、それを見落とし、気づかず、数十年の時間が経っていた。しかし、だか  
らこそ、その贈与は呪いになることなく、男性のもとに届いたのだ、と。この『16時の徘  
徊』のエピソードは、贈与論のモデルの一つが隠されているといえます。

内田樹さんは、贈与に関連して「アンサンング・ヒーロー」という概念を提示されています。

ある村人が道を歩いていたら、堤防に小さな「蟻の穴」を見つける。何気なく小石をそこに詰め込んで穴を塞いだ。その「蟻の穴」は、放置しておくこと次の大雨のときそこから堤防が決壊して、村を濁流に流すはずの穴だった。でも、穴が塞がれたせいで、堤防は決壊せず、村には何事も起きなかった。この場合、穴を塞いだ人の功績は誰にも知られることはなく、また、本人も自分が村を救ったことを知らない。

その功績が顕彰されない陰の功労者。歌われざる英雄、アンサンング・ヒーロー (unsung hero)。つまり、評価されることも褒められることむなく、心知れず社会の災厄を取り除く人ということです。アンサンング・ヒーローはその定義上、私たちに分かるかたちでは名乗ってはくれません。しかも、「その活躍が災厄を未然に防いだ」という事実によってのみ、その存在が同定されるような存在者です。

アンサンング・ヒーローには、インセンティブつまり報酬はありません。また、ある人がアンサンング・ヒーローにならなくても、誰も彼を責めません。なぜなら、アンサンング・ヒーローが行う贈与はもともと誰の責任でもない仕事だからです。防がなかったとしても誰の責任にもならないが、自分がやらなければならないと感じる人のことをアンサンング・ヒーローと呼びます。アンサンング・ヒーローは自分が差し出す贈与が気づかれなくても構わないと思うことができる。それどころか、気づかれぬままであってほしいときえています。アンサンング・ヒーローは、私たち見えないところで、語られることなく、連続と受け継がれていきます。

この世界には無数のアンサンング・ヒーローがいた。私たちの世界は、この顔も知らぬ無数の人々によって支えられている、ということに気づくこと。それに気づいた主体はアンサンング・ヒーローからの贈与を受け取ることができ、その返礼として、ふたたびこの社会を見えないところで支える主体となることができるのだ、といます。

このように、アンサンング・ヒーローはそのような求心的思考によって、正しく推論を行うことができる人によって、初めてその存在を認められます。「この世界には無数のアンサンング・ヒーローがいたのだ」と気づいたとき、私たちは大人になるのだ、と。

贈与はすべて、「受け取ること」から始まります。

「自分はたまたま先に受け取ってしまった。だからこれを届けなければならない」。だから「生きる意味」「仕事のやりがい」といった、金銭的な価値に還元できない一切のものは、私たちがメッセンジャーになることで、贈与の宛先から逆向きに与えられます。贈与は、受け取っていた過去の贈与に気づくことから始まります。

そして、これを実行する極めてシンプルな方法が、「勉強」である、といます。大人にとっての勉強は「それは世界ともう一度出会い直すための手段」です。

具体的に言えば、歴史を学ぶことです。いわゆる日本史、世界史も大切ですが、経済史、政治思想史、科学史、数学史、技術の歴史、医療の歴史なども重要です。

歴史を学びながら、「もしその世界に自分が生まれ落ちていたら、この目には何が映るのか、どう行動するか、何を考えるか」を意識的に考えるようにすることが大切だといえます。そこに生きる一人の生身の人間としての自分を考えてみる。

私たちにとって、過去の世界は十分に異世界です。そして、ふとその想像から戻ってきて、この現実の世界を見渡してみたとき、私たちにはあまりにも多くのものが与えられていることに気づくはずで、不当に受け取っていたもの、誤配に気づくはずで、これらは生まれる時代が異なっていたら、私たちのもとへは届かなかった、と。

教科書には、多くのアンサンブル・ヒーローによる贈与や贈与にいたるまでの苦勞、贈与の意味は書かれていません。私たちに誤配された手紙に何が書かれているかを語ってはくれません。そのため、私たちに必要なのは、届いてしまっていた手紙を読み解く能力、想像力になります。

端的に言えば、教養とは、誤配に気づくことです。どれだけ多くを知っていたとしても、それだけでは教養とは言えません。手に入れた知識や知見そのものが贈与であることに気づき、そしてその知見から世界を眺めたとき、いかに世界が贈与に満ちているかを悟った人を、教養ある人と呼びます。そしてその人はメッセンジャーとなり、他者へと何かを手渡す使命を帯びるのです。使命感という幸福を手にする事ができる、といます。

本書を読みながら、これまでいかに多くのものを無条件に与えられてきたことに気づかされます。差出人から始まる贈与ではなく、受取人の想像力から始まる贈与を基礎に置くこと。そのような贈与によって、私たちはこの世界の「すきま」を埋める地道な作業の担い手になりたいと思います。

(\*1) 近内悠太『世界は贈与でできている 資本主義の「すきま」を埋める倫理学』、ニューズピックス、2020年刊まで』、日経BP、2022年刊